北國

ゴビ砂漠 地元政府と交渉成立

3000ヘクタール緑化へ 飛行機播種

ゴビ砂漠で植樹活動に取り組むNPO法人「世界の砂漠を緑で包む会」（金沢市）は1日までに、現地で飛行機を利用した植物の播種（はしゅ）を行った。広大な砂漠地帯の緑化を進めるため数年前から地元政府と交渉を重ね、ようやく実現した。今回の播種で植物の成長が確認できれば、今後も飛行機を活用する計画で、約3千㌶を緑でつなぐ「グリーンベルト」の夢が大きく前進しそうだ。

種をプロペラ機に詰め込む関係者
＝中国・内モンゴル自治区阿拉善左旗

金沢のNPO法人「包む会」

飛行機による播種は先月20日、包む会が植樹を続ける中国・内モンゴル自治区阿拉善左旗で行われた。地元政府の協力で用意されたプロペラ機で、360㌶にハナボウとサーガイゾウの種1・8㌧を散布した。

同会顧問の染井正徳金大名誉教授が開発した根の成長促進剤「ソムレ」に浸した種が一部で用いられており、ソムレの効果や砂漠地帯で種から植物を育てる実験も兼ねる。

包む会は2004年から同所で植樹を開始。長さ20㌔、幅1・5㌔の「グリーンベルト」のうち、これまでに半分の1500㌶に180万本を植林した。

ただ、手作業では時間や労力を要するため、大規模な播種は長年の目標だった。包む会の地道な活動が実ってようやく実現した取り組みに、大沢俊夫会長は「今回の取り組みが成功すれば、緑化が一気に進む。しっかり根付くことを願いたい」と話した。

地道な活動実り夢前進

いしかわ総合